

大學を見る「目」

寺崎 昌男

てらさき・まさお
桜美林大学大学院

「大學の先生方は、学部案内のパンフレットを学者仲間に見せるために書いておられるんじゃないんですか。進路指導室には壁いっぱいに大學案内が送られてきます。仲間うちの文章など誰も読みませんよ。高校生、それも一年生にわかるように書かなければだめです。進路は一年生の終わりに決まる人が多いんです」

「生徒たちは、どこへ行けば何を学ぶことができるか、その先に何があるか、よく知りたいと思っているんです。学部・学科・コースの果てまで、勉強の具体的な中身を知りたいと思っています。ムード広告や独りよがりの文章では、何の役にも立ちません」

「オープン・キャンパスをなさいますね。あのとき大事なのは、ちよつとした出会いです。教室がわからないでうろろろしているとき、廊下であった教授がどうやって教室

を教えてくださいましたか。その態度一つで、『あの大學は絶対受けません』とか『冷やかして行っただんですが、是非受けてみようと思いました』とか言うんです。大事なものはプログラムじゃない。ちよつとした対応です」

高校の先生方の遠慮ない話を聞いたのは、シンポジウムをやったお陰だった。立教大学にいたころには、発足直後の全学共通カリキュラム運営センター主催で「外から見た大學」と銘打って開いた。今勤めている桜美林大学でも大學教育研究所主催で「外から見た桜美林大学」を開いた。いずれも一番感心したのは、出席した学内教職員だった。

大學の人間は大學を知らないとよく言われる。当たっている。自分が勤務している大學の組織や制度のことで、からきし疎い人がたくさんいる。日本には法学士も文学修士も工学博士もないんですよ、ただ「学士」「修士」「博

士」の三つの学位があるだけです、と言うと驚く先生が、今でもいる。内部制度にしてそうだから、外から大學がどう見られているかなど、およそ眼中にない人もたくさんいる。高校の先生だけでなく、ジャーナリスト、進学情報企業の専門家、審議会委員などを幅広く招いたシンポを企画したのも、学内のそういう流れに警鐘を鳴らしたかったからである。

ところで、外からの目といえば、大学評価はいよいよ新しい段階にはいる。この四月、学位授与機構の中に、それと並んで、大学評価機構が新設され発足した。新機構は正確には「大学評価・学位授与機構」という。

おりしも、国立大学の独立行政法人化が推進のテーブルに載ろうとしている。活性化と効率化を標榜する制度であり、しかも、法人とは言え、財政は基本的に国に握られている。となるとその前提に強力な「評価」メカニズムが不可欠なのは、子どもにでも分かる。

つまり評価機構の発足によって、外からの大学評価はこれまでになく巨大なステージを準備され、新段階に入ったのである。筆者はこれまで、大学評価は「社会的評価」「行政的評価」「自己評価」「相互評価」の四つのカテゴリーに分かれると考えてきた(拙著『大学の自己変革とオート

ノミー』参照、東信堂、一九九九年)。仮にこれを使うと、新段階とは、「行政的評価の圧倒的な比重増が、国立大学を主たる対象として起きてしまったこと」を意味することになる。今のところ評価機構の評価予定対象は、国立大学に限られている。だが公・私立大学が巻き込まれないという保証はない。大学審議会はそれをほのめかせている(九八年十月答申)。

「厳しさのいよいよ加わる」時代がやってきた。

自己変革をめざす模索と改革に賭けるか、サバイバルとリストラの激流に吞まれていくか、大学は大きな分かれ道に立っている。

